

職員への再任挨拶

4年前に学長に就任したときには、正直なところ、学長の役割の重要さを思い、責任を全うできるかどうか大きな不安を抱いてのスタートであったことを今でも昨日のように思い出します。幸いにも、職員の皆様の強力なサポートをいただき、一期目を全うすることができました。このたび、学長に再任され、今日からさらに2年間、重責を担うことになりました。昨年の12月の意向投票では、思いもかけない高い支持をいただきましたが、これはこれまでのかじ取りが評価されたからではなく、逆に不十分であって、評価に値するレベルになるようもう少し努力しろ、という意思表示であると受け止めております。これまでを振り返り、至らぬところを反省し、改めて初心に帰って東京農工大学の前進のために全力で努力したいと思っております。

これまでの4年間を振り返った時、農工大学には大きく変わった部分が意外ともいえるほどに多いことに気がきます。それらは、法人化という制度改革から必然的にもたらされるもの以上に、自らの意思によるものが主であるといつてよいと思います。本学は急速に変革しつつある、といえると思います。

私は、4年前の職員の皆さんに対する挨拶で、次のようなことを申し上げました。『運営費交付金が毎年6500万円程度も無条件で削減され、人件費も同様に削減されます。これに対処するには、可能な範囲で効率化をはかり節約し、外部資金の現状以上の獲得に努力することが必要であるが、それだけでは十分ではない。また、定員の単純な削減だけを考えるのではジリ貧状態に陥るでしょう。教育と研究のレベルを維持することは当然として、より上を目指せる組織体に自己変革することが必要で、縮小再生産ではなく、新分野への発展をも目指しうる余力ある組織へ改革すべきである、』と。

そして、それに続けて次のように述べました。

『法人化による厳しい環境への対応は、組織の見直しを迫るものであり、その基本は、本学の長所をさらに伸ばし、短所となっている部分を時代の変化を先読みして大胆に変革・改組することではないか、と思います。それを具体性のある長期ビジョンとして策定するための検討を早急に始めたいと思います。これは大きな変革につながると考えられ、そこには厳しい決断や選択を迫る部分もあるでしょう。しかし、「全学の発展と利益のために」という視点に立てばそれは乗り越えられるものです。その舵取りが私の役割とも言えるでしょう。大学が発展していくことは、大学構成員一人一人の利益でもあります。その長期ビジョン実現に職員一人一人がやりがいを感じ、強い責任感と参加意識をもって取り組む体制を作ることが私の仕事と思っております。それは就任早々の大仕事と自覚しておりますが、職員の皆さんもこれまでのしがらみから離れ、全学的視点からの議論に積極的に加わり、知恵を出していただきたいと思います。』

これらは 4 年前に申し上げた、私のいわば所信表明にあたる挨拶の中の一部ですが、この部分が最も重要で、かつ合意形成に最も困難が伴う部分でもありました。その内容は、過日、農・工・BASE の教授会でグローバル 30 を取り上げて話した内容に通じる部分が少なく、4 年を経過した今、重要課題として残されたままになっている部分ともいえます。その後の状況の変化から新たに課題として生まれたものもあるとはいえ、4 年前に掲げたものが完全には達成されていないことは確かであり、反省しているところであります。さらに二期目をやれ、ということは、この部分にきちんと結論を出せ、ということであろうと考えております。

グローバル化が進む中で、日本国内の大学だけでなく、外国の有力大学とも伍して行ける体制を作ることは、東京農工大学が発展するためには必須のことであり、それを早急に構築しなければなりません。それには、教職員が一丸となってこの難局に立ち向かうことが求められます。ここにお集まりの皆さんは、この厳しい戦いともいえる競争に望む重要な戦士です。私は新たな決意のもとに、学内のコンセンサスを得つつ、グローバル化へ対応した大学作りへ向け、その先頭に立って出来る限りの努力をするつもりです。職員皆様の一致した協力を切にお願いする次第です。東京農工大学を小さいながらも特色ある、存在感のある国際的教育研究拠点大学にするために力を合せて努力いたしましょう。

皆様のご支援とご協力をお願いし、再任にあたっての挨拶といたします。